

第二部

『ITソリューションフロンティア』の過去を振り返って

本稿は、9月1日と25日に行われた編集委員による座談会の内容をまとめて編集したものです。

座談会の第二部では、過去の論文のなかから、注目すべき論文、興味を引かれた論文を編集委員のメンバーそれぞれにあげてもらい、発表当時の背景や意義について語ってもらった。そこで話題になった論文のなかから、いくつかを本号の巻末に再掲し、読者とともに情報システムのさまざまな歩みを振り返りたい。

司会 皆さんには事前にイチ押し論文をあげてもらって、お手元の一覧表にしてありますが、そのなかのいくつかを今号に再掲することにしています。あげていただいた論文をみると、古いもの多くて、2003年以降のものがありません。これは、新しくなるほど内容的に現在の状況と通じる場所があつて、面白いものであつてもまだ振り返るまではいかないということではないかと思ひます。なお、1999年以後の論文はNRIのホームページからPDFファイルを見られるようになっているので、再掲する論文は1998年以前のもので、なおかつ著者が現在もNRIに在職しているものに限ることになります。それでは皆さんがあげられた論文についてお話しください。

新技術への対応と先進性・先見性に注目

三崎 私がいちばん興味をもつのはWindows NTや初期のマイクロソフト社関係の論文です。日本では1990年代からWindowsが登場して、どこのオフィスに行つてもWindowsがあるという状況になりました。それによつていろんなものが変わったという気がします。とくにWindows NTの登場によつてオフィスにITが一気に普及した、そこがいちばん興味が

あるところですね。あとは、実際に自分で関わつていたこともあるので、米国の証券会社の話とかホームトレードの話ですね。

司会 Windowsが企業の業務システムのなかで大きなウエイトを占めてきて、その結果システムが大きく変わつてきたということは流れとしてはわかります。それでは『ITソリューションフロンティア』の論文がそれについて先進的であつたと言えるのでしょうか。

三崎 NRIは早くから、メーカーやベンダーではない部分でマイクロソフト社に注目してきましたよね。STAR（統合証券バックオフィスシステム）の端末なども全部Windows NTにしたりして、先駆的に取り組んできました。そういう意味では、Windowsに関してもNRIの技術力のひとつとして先取りできたところがあつたのではないのでしょうか。成功や



失敗もあったし、お先走りもあったかもしれませんが、それですごく学んだような気がしますね。

八木 私も1994年6月特別号の「日本市場におけるWindows NT普及の可能性」をあげました。将来はこうなるだろうという話と、実際のNRIのソリューションが提示できているので、両方の意味であらためて良いなと思っています。1994年にはまだWindows NTが使えるとはほとんど誰も思っていませんでした。その1994年にWindows NTを業務システムに大々的に使ったのがSTARです。

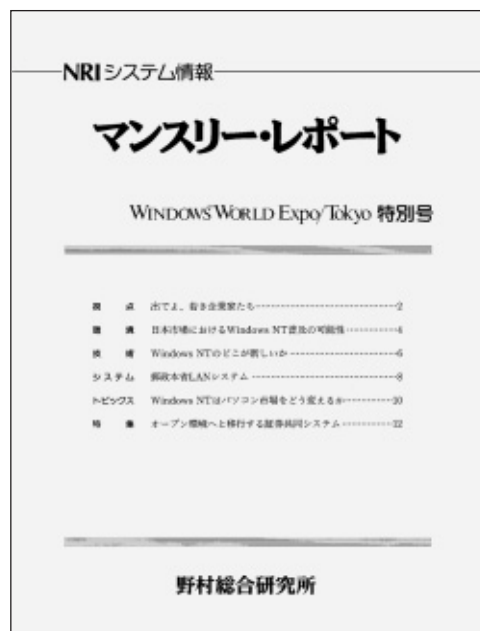
小野島 私は「カード社会を加速するICカード」をあげました。ICカードがセキュリティ機能が低いと書いてあるのですが、ICカードを導入して、指紋認証や手のひら認証のような高度なセキュリティ機能を提供しはじめたのはここ最近ですね。読んでみると、「ICカード比較」という表が出ていて、メモリーカード、ワイヤードロジックカード、マイクロプロセッサカードと書いてあります。いまはもう聞かない名前で、こんなものがあったのか、ずいぶん時代が変わったなあという新鮮な感じがしました。昔と今の比較をするのもけっこう面白いのかなということで出してみました。

三木 過去の論文のタイトルをざっと見てみると、そのときにはホットなんだけれども、いまとなつては古い話だなというようなものもけっこう多いですね。ITというのは移り変

わりが激しいですから、その時々話題になっていることを書いているものが多い。それで、長期的に5年先、10年先ぐらいを見ているような話のほうに興味を引かれます。たとえば「フリーソフトのビジネス利用」というのは、いまのオープンソースのはしりで、このビジネス利用ということを1994年に書いているというのは、先見性があるなと思って選びました。もっと言うと、そのときに腰を据えて投資していれば大きなビジネスになったかもしれないものも多かったという気がしますけどね。

司会 その時々、話題になっている商品をNRIが開発しているということは言えますね。

三木 商品も開発していますけども、早すぎているのは無い、みたいなものがけっこう多い



1994年6月特別号表紙

と思います。ですから、いまは誰も気付かないけれども、10年後に振り返ってみると価値があったというものが『ITソリューションフロンティア』にもあるのではないのでしょうか。

見原 私はたまたま別件で論文を調べていたら、1987年3月号の「ホームトレードの時代」というのがありました。インターネットトレードが普及しはじめたのがだいたい1999年ぐらいですから、これを10年ぐらい前に予測しているわけで、それぐらい先見性があったという意味で選びました。

田村 ひとつは、1989年の8月号から10月号に連載された「大規模システム開発のカギを握る方式設計」という論文をあげました。1990年ごろにダウンサイジングという言葉が出はじめて、大規模システムはそっちに移行

するだろうという雰囲気はあったけれども、じつはどうやるのかぜんぜんわからないわけですね。ダウンサイジングではこの方式設計に相当することをどうやってやるんだろうとか、そんなことをよく考えていたと思います。大規模CSSという言葉が出てきたのが1998年ぐらいですから、だいぶそれに先行する時期、まだまだ1990年ごろはホストシステム中心の時代でしたが、そこでもダウンサイジングについての考慮、方策をいろいろやっていたことがわかります。

水野 私もその方式設計の連載は注目して良いと思いますね。

司会 そういう問題に先進的に取り組んでいたということですね。

田村 きちんと考えていたということは言えますが、先進性とか先見性は新しいものに何でもすぐに飛びつくということではないわけです。もうひとつあげたのが1990年5月号の「大規模システムでの分散処理選択のポイント」ですが、まだちょっと慎重なんですね。基幹システムよりは周りのところを少しずつダウンサイジングしていこうかという時期で、そのへんのところのポイントがよく出されていると思って選びました。

武富 私が2つあげたのは、ユビキタスネットワークと3D-IESに関するものです。1999年7月号の「エレクトロニックコマースの阻害要因とその解決手段」という論文で、はじめて「ユビキタスネットワーク時代」という言



1989年8月号表紙

葉が出てきています。しかし、このときはまだ世の中には受け入れてもらえなかった表現でした。また、2000年3月号では、3次元仮想空間を利用した次世代教育システムとして3D-IESを紹介していますが、世の中で3次元の仮想空間がはやりだしたのは、ずっと後のことです。当時はまだ周りに受け入れてもらえる土壌がなかったということではないでしょうか。

三崎 3D-IESが出たころはまだハードウェアが追いつかなかったんでしょう。いまの「セカンドライフ」でも、巨大サーバーや巨大グラフィックスのすごい帯域が必要だけど、そんなものをふつうの人は持ってないですよ。3D-IESはグラフィックス系もかなり高価なものを使っていたから。でも、大学とかにはいろいろなところに入りました。NHKの「英語でしゃべらナイト」という番組でも使われたりしました。

尾上 「ユビキタスネットワーク」という言葉はNRIが初めて使ったのですか？ 2000年10月号に「ユビキタスネットワークのITロードマップ」という論文がありますが、このあたりが最初なんですか？

武富 その号が200号の記念号でした。ユビキタスネットワークの特集が掲載されていたと思います。

司会 NRIでは2000年の12月に『ユビキタス・ネットワーク』という単行本も刊行しています。なお、ユビキタスネットワークに関

する本は3部作で出しています。「ユビキタス」という用語はすでに使われていたようですが、インターネットでも、ユビキタスネットワークという概念を提唱したのはNRIだと書いてありますね。

柴山 ユビキタスコンピューティングとユビキタスネットワークは使い分けているというのがNRIの考え方ですね。

顧客とのパートナー関係のなかで

尾上 私が以前、お客様との対応で留意していたのは、お客様が要件を決めるのが遅くなりがちだということでした。そういう観点であらためて2000年11月号の「企業内システム部門の役割変化と今後の課題」を見てみると、いまでも同じことが言えると思います。今後、



2000年10月号表紙

■これまでの表紙の変遷



創刊号 (1984年4月)



1984年12月号



1989年1月号

アウトソーシングがどんどん採用されて、技術が高度化してしまうと、社内でできることが限られてしまうので、そのときに発注側が何を考えなくてはいけないう、どんなことを守らなくてはいけないうということを、地道に言い続けていくしかないのではないかと思いますね。そういう意味で、この論文は10年前のものですけど、やはりNRIは業界のなかでまだまだ地道に言い続けていく立場なのかなと思います。そういうことで、まずこの論文をあげました。

司会 それが顧客企業のパートナーとして必要だということでしょうね。

尾上 そうですね。あとは、1999年10月と11月の「プロジェクトマネジメントの標準化」です。プロジェクトマネジメントは、大型汎用機とCSSでは、基本は同じとはいながらもけっこう違う部分もあるので、そういう変化というものをNRIはきちんと実績に基づいて発信し続けたという意味で参考になるものが多いと思います。お客様に聞いてみても、

やはり裏付けのあるものをお客様は求めているところもあるので、そういったところでNRIの苦労話というのでも良いのかなということとでいくつかあげてみました。

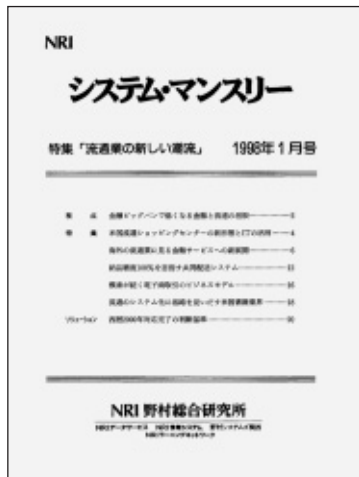
畠山 私は自分の論文ですが、お客様から非常に評価していただいた1994年2月号の「米国証券会社に見る垂直統合とシステム部門」をあげました。そのお客様は『マンズリー・レポート』の時代からの読者で、その人がロンドンのディーリングルームでシステムアドミニストレーターみたいなことをやっておられたときに、たまたま私の論文を見て、「悩みを解決する方向性を与えてくれた」という感想を送ってくれました。これはアメリカにいたときの話ですが、ニューヨークの証券会社の状況を見て、日本とぜんぜん違うところを骨身に沁みて感じていたので、あえて書いたものです。

司会 どういう内容ですか？

畠山 システムとかITソリューションというものに対する経営のドライな割り切りみたい



韓国語版（1996年7月）



1998年1月号



2001年6月号

なものが、組織になるとこうなるということ、要するに不明瞭なコストは一切排除するという、究極まで詰めていくとこうなるという話です。で、ITは道具にすぎないというところと、SEというのは、専門家として市場から調達しようと思えば調達できるものだという、そういう環境を前提に語っています。日本とはだいぶ環境が違いますけども、ソフトウェアの使い方とか、そういうものが参考になるのではないかと、そういうふうに感じていました。

考えさせられる[視点]

垂水 先端の技術とか、最新の業界の動向みたいなのがひとつのポイントだと思いますけど、たぶんそのへんは皆さんからたくさん出てくるだろうということで、ちょっと違うものを選んでみました。

司会 1996年6月号の[視点]で、『知識』と『意識』というタイトルですね。

垂水 先見性みたいなものひとつだと思いますけど、

ますけど、[視点]というのは普遍的な話が書かれていて、これも要するに「変化をさせる“意識”と変化を受け止める“知識”はバランスが大事なんだ」というようなことが書いてあるわけです。当時は目先のことで精一杯だったのが、高い視点からの話に少しハッとしたという記憶があります。自分としてよく覚えているもののひとつですね。

吉川 私は2001年7月号の[視点]ですけども、タイトルは「古代エジプトと情報セキュリティ」というものです。情報サービス産業というのは、最近、不人気ということで、これに携わる人間たちも目先の技術などをいろいろ追いかけながら、一所懸命、日夜努力しているわけですが、自分たちが何をやっているのかということが高い視点からわからないと、非常に疲弊していくのではないかと思います。ですから、この論文のように「自分たちの業務にはこんな意味があるんだ」ということを、高い視点から書いてあるようなものが必要ではないかというのがこれを選んだ



2002年1月号



2002年2月号



2002年11月特別編集号

理由です。

司会 タイトルからして面白そうな感じはしますね。

吉川 これは要するに、ピラミッドの財宝の管理をするのにセキュリティが昔も必要だったということ、いまの情報セキュリティと絡めて面白く書いてあると思います。技術的なことにはちょっと関係ありませんけども、こういうことを考えると、情報セキュリティとかそういうシステムも一所懸命やれるかな、ということですね。

司会 安積さんと中澤さんはまだお話しされていませんが、いかがでしょうか。

安積 技術などの専門的な部分はあまりよくわからないところがあるので、私自身のイチ押し論文というものまではちょっと出てこないかなという感じです。

中澤 法制度について論じたものとか、そういう観点で10年先といったところを見ているような論文はないかなと思って探してみたのですが、ちょっとうまく見つけられなかった

です。

司会 最後に編集長からまとめのひと言をお願いします。

柴山 皆さんからあげていただいた過去の論文について、だいたい2つの傾向があるように思います。ひとつは、未来予測を書いているそれがそのとおりになったというものの、もうひとつは、その時々メジャーな動向について書いたもので、いま振り返ってみるとこんな変遷があったなと思わせるもので、そういう2つの種類があったように感じました。さらに2つ目のほうに関しても、変化を表しているものと、その時代時代の状況を表したものであるというように、いくつかパターンもありそうです。このようなことを考えながら、もう一度、過去のさまざまな論文を読み直してみることは、われわれにとっても、読者にとっても意味があるのではないかと思います。

司会 それではこのへんで終了させていただきます。本日はありがとうございました。■

編集委員が注目した論文・座談会で話題になった論文から抜粋

太字(*)のものは本号に収録されています

1985/05	トピックス	カード社会を加速するICカード
1985/06	特集	大型コンピュータのオペレーティング・システムの現状と問題点*
1987/03	視点	ホームトレード時代の到来
1989/04	特集	大規模オンラインの移行
1989/07	特集	大規模システムの維持
1989/08	特集	大規模システム開発のカギを握る「方式設計」(1)*
1989/09	特集	大規模システム開発のカギを握る「方式設計」(2)
1989/10	特集	大規模システム開発のカギを握る「方式設計」(3)
1990/05	技術	大規模システムでの分散処理選択のポイント
1990/05	視点	大規模システム開発のカギを握る保守
1994/02	トピックス	米国の証券会社に見る垂直統合とシステム部門*
1994/03	トピックス	フリーソフトウェアのビジネス利用*
1994/06 特別号	トピックス	Windows NTはパソコン市場をどう変えるか
1994/06 特別号	環境	日本市場におけるWindows NT普及の可能性*
1995/05	視点	新たなワークスタイルの実現*
1995/07	特集	クライアント・サーバーシステム構築のノウハウ集*
1996/01	環境	家庭生活のインフラとなるパソコン*
1996/02	米国便り	地域社会と共存する無線インターネットサービス
1996/04	技術	インターネット接続におけるセキュリティ管理
1996/06	視点	「知識」と「意識」
1996/06	ソリューション	PCで実現するサイバービジネスCB-DOCK
1996/10	特集	サイバーコマースの本格展開に向けて
1996/10	視点	三つの方向に進化するイントラネット*
1997/10	視点	「オーイおじさん」と「情報リテラシー」*
1998/05	ソリューション	探索型ネットワークコミュニケーションツール「ネットサーベイ」
1998/08	視点	CSSプロジェクトのマネージャー心得集*
1998/10	特集	PC上での大規模CSS構築を可能とするPROBE NT
1998/10	特集	大規模CSSの基盤ツールinfoSTAR
1998/10	特集	大規模CSSの構築で重要性が増す方式設計
1998/10	視点	大規模システムとブレハブ型システム開発*
1998/12	視点	情報社会の命綱*

—以下の論文は野村総合研究所のホームページから閲覧できます—

1999/07	特集	エレクトロニックコマースの阻害要因とその解決手段
1999/07	視点	情報技術と業務の変化に思うこと
1999/11	システム	プロジェクトマネジメントの標準化(上)
1999/12	システム	プロジェクトマネジメントの標準化(下)
2000/03	ソリューション	次元仮想空間を利用した次世代教育システム
2000/07	特集	インターネット上の3次元空間双方向教育システム
2000/10	展望	ユビキタスネットワークのITロードマップ
2000/10	展望	ユビキタスネットワーク社会の到来
2000/11	トピックス	企業内システム部門の役割変化と今後の課題
2001/07	視点	古代エジプトと情報セキュリティ
2002/12	特集	ユーザーの視点からみたITプロジェクトマネジメント
2002/12	特集	信頼されるプロジェクトマネジメントとは